

18 世紀の辞書に見る *Self-Compound* ——Shakespeare の使用に比較して——

脇本 恭子

0. 序

語形成 (word formation) による語彙の拡大には、主に 2 つのプロセスが挙げられる。一つは、語基 (base) に単体では使用できない拘束形態素 (bound morpheme) が付加される接辞添加 ([X+affix] もしくは [affix+X]) の派生 (derivation) で、もう一つは自由形態素 (free morpheme) 同士の結びつき ([X+Y] 形式) で構成される複合 (compounding) である。これらのプロセスは、既に古英語 (Old English : 以下 OE) の時代に辿れるが、英国近代小説の祖の一人である Samuel Richardson (1689-1761) の作品についても、新語・臨時語を含め、数多く造語の試みが見受けられる。この語形成からのアプローチについては、Ball (1976) の指摘がまず挙げられるが、筆者自身による分析調査においても、接辞の添加を中心に、これまでに多面的に検証してきた (脇本 : 2007, 2008, 2009, 2011, 2012)。そして今回焦点を当てようとしているのが、*self* を伴う複合語 (compound) である。

周知の通り、18 世紀は辞書編纂が盛んに行われた時代である。ある語が辞書の見出し語や例文に採択されるということは、辞書の性質にもよるとはいえ、その語が一般に知れ始めたということ、あるいは、少なくとも知識人層に浸透したということの指標となる。本稿では、*self-compound* が、この時代の主要辞書にどの程度、どのように記載されているのか、ECCO (Eighteenth Century Collections Online) 提供のデータベースを基に、当時の使用状況を調査する。さらには、Richardson をはじめ、後続の多くの作家に影響を与えた前時代の文豪 Shakespeare の *self-compound* の特徴を浮き彫りにする。

1. 事前考察

1.1 Richardson と Shakespeare

Self-compound は、Richardson の三作品のうち最初の *Pamela* (1740-41 : 以降 *Pam*) では 21 種 32 の頻度であったのが、次の *Clarissa* (1747-48 : 以降 *CI*) では 62 種 87 の頻度、さらには最後の *Sir Charles Grandison* (1753-54 : 以降 *SirCG*) では 50 種 88 の頻度と、後期の作品に使用の度合いが増している。¹⁾ また、単に頻度の問題だけではなく、独特の言い回しやレトリックによって特徴付けられていることも多い。例えば、以下の例である。²⁾

(1) Self-taught, self-acquired, these! (*CI* Vol. I, Let.31, p.214)³⁾

(2) Since evils self-caused, and avoidable, admit not of palliation or comfort.

(*CI* Vol. IV. Let.5, p.51)

(3) Self-do! Self-undone!—No time for my affairs! (*CI* Vol. VIII. Let.19, p.58)

前ページの (1), (3) では *self* の反復が見られるが, (1) では類義語の分詞形容詞 (participial adjective) を, (3) では意味上相対する動詞の原形と過去分詞形を並列させている。さらに “self-acquired,” “self-undone” は, *Oxford English Dictionary* CD-ROM 版 (以降 *OED*²) にも, 最新の *OED* である online 版 (以降 *OEDonline*)⁴⁾ にも記載がない。(2) の “self-caused” は *OED*² には記載がないが, *OEDonline* では この (2) の引用文が初例 (1748) となっている。現代イギリス英語 1 億語のコーパスである BNC (British National Corpus) を見てみると, (1) の “self-acquired” は BNC に一例あるが, (3) の “self-do,” “self-undone” は一例もない。“Self-undone” の方は, 史的アメリカ英語 4 億語のコーパスである COHA (Corpus of Historical American English) に, かりうじて一例 (1929) 見られるものの, 今もなお稀な複合語であるということに変わらない。

Self を第一要素とする複合語は, *OED* (以降 *OED*², *OEDonline* 共通) に “The number of *self*-compounds was greatly augmented towards the middle of the 17th cent., when many new words appeared in theological and philosophical writing” と解説されるように, 17 世紀に激増している。Richardson による特殊な *self*-compound の使用も, 彼自身が初めて試みた技巧というより, 前時代の作家, とりわけ Shakespeare から鼓舞されたところが大きいものと推測される。よって, 本論考では, Richardson が *self*-compound を多用する誘因を先人 Shakespeare に求め, その造語法に目を向けながらこの複合語の史的考察を展開する。

1.2 英語辞書発達の歴史

OE の時代にも記録が残る *self*-compound について, *OED* には “In OE. the number of recorded compounds is 13, of which half exhibit the prefix in the objective relation.” と記されている。かつてはわずか 10 余りであったものも, *OEDonline* の *self*-prefix に収録されている例だけでも 700 語を優に超す。見出し語となっているものを含めると, さらにその数は膨れ上がる。このように, 無限に増大する複合語であるが, 初期の英語辞書ではどのように記載されていたのであろうか。この疑問に答えるには, 初期近代英語 (Early Modern English : 以下 EModE) から後期近代英語 (Late Modern English : 以下 LModE) に至る主な辞書を調査する必要がある。

英語辞書発達の歴史については, これまでに洋の東西を問わず数多くの研究対象となっており, これをテーマとする論文は, 古くは *Transactions of the Philological Society* に寄稿された Danby P. Fry による “On Some English Dictionaries” (1859) や Henry B. Wheatley による “Chronological Notices of the Dictionaries of the English” (1865), 新しくは, Jukka Tyrkkö による “Notes on eighteenth-century dictionary grammars” (2013), 18 世紀専門の学者 Jack Lynch の “The Ground-Work of Stile: Johnson on the History of Language” (2000), Martin M. Levinson の “*The Oxford Dictionary: A Time-binding Marvel*” (2011) 等々, 枚挙にいとまがない。Starnes と Noyes 共著の *The English dictionary from Cawdrey to Johnson, 1604-1755* (1946 rpt. 1991) は, ModE の時代の英語辞書の特徴と発達を概観するのに特に有用であ

る。邦人研究者では、林哲郎著の『英語辞書発達史』(1968)、永嶋大典著の『英米の辞書—歴史と現状』(1974)、小島義郎著の『英語辞書の変遷—英・米・日本を併せ見て』(1999)などが挙げられるが、近年では、三輪伸春著の『英語の辞書史と語彙史』(2011)に、詳細且つ効率的にまとめられている。

本稿では、主に 18 世紀刊行の印刷物を画像ファイルで収めた ECCO のアーカイブから、上述の先行研究を参考に精選した辞書に収録されている *self*-compound について、初版が Dr. Johnson の『英語辞典』(1755) 以前と以降の二期に分けて、収録語数と種類の移り変わりを総括していく。当時最高峰の辞典刊行の前後で違いが見受けられるかどうか、とりわけ Dr. Johnson の編纂法に影響されたかどうか検証していきたい。

2. 18 世紀の辞書 : Dr. Johnson の『英語辞典』以前

2.1 難解語の辞書

辞書の歴史は、EModE 期の真っ只中にある 17 世紀に遡ると、Robert Cawdrey による *Table Alphabeticall* (1604) がまず挙げられる。英語で定義された英語の最初の辞書 (“the first monolingual dictionary of English”) として一般に知られるが、詳細なタイトルである “A Table Alphabeticall, conteyning and teaching the true writing, and vnderstanding of hard usuall English words, borrowed from the Hebrew, Greeke, Latine, or French, &c. With the interpretation thereof by *plaine English words, gathered for the benefit & helpe of Ladies, Gentlewomen, or any other vnskilfull persons.*”⁵⁾ から察せられるように、外来語をはじめとする難解語を婦女子や初学者に教授する意図で編纂された辞書である。そのため、*self* の複合語はおろか、“self” という語自体収録されていない。

Cawdrey に続く著名な辞書編纂者としては例えば John Bullokar が挙げられるが、彼の *An English Expositor* (1616) も、総語彙数が大幅に増えたとはいえ、主に難解語の語彙集という点では Cawdrey の辞書と同様、“self” のような平易な本来語の記載はない。Bullokar の辞書は版を重ねて、1707 年には第 10 版 (*The English Expositor IMPROVD*) も出されているが、副題の “Being a Complete DICTIONARY, TEACHING The Interpretation of the most difficult Words, which are commonly made use of in our *English Tongue*.” に示されるように、難解語の意味を解説する用語集としての役割であったことが窺える。それは、1719 年の第 12 版や 1775 年の第 19 版においても同様である。

2.2 John Kersey [the Younger]⁶⁾

かくして、本格的な辞書は 18 世紀以降初版の辞書の出現を待たなくてはならないが、その前に John Kersey 編纂の *Dictionarium Anglo-Britannicum* (初版 1708: 以降 *DAB* と略す) に触れておく。副題が “Or, A GENERAL English Dictionary, COMPREHENDING A brief, but Emphatical and Clear Explication of all sorts of difficult WORDS, . . .” と続くように、18 世紀に入ると、難解語だけでなく日用の一般語彙も収録されるようになる。*DAB* では *self*-compound の掲載に及んでいないが、同じ編者による *A NEW English Dictionary: Or, a*

Compleat COLLECTION of the Most Proper and Significant Words, Commonly used in the LANGUAGE (初版 1702 : 以降 *NED*) には、*Or* 以下の副題が示すように、難解語に限らずあまねく語彙を収録している。よって“self”とその派生語への言及もあり、複合語については、以下の【表1】の語が選定されている。

【表1】*NED* (1702 : 初版)

Self-conceit	Self-ended	Self-murder
Self-conceited	Self-evident	<i>The Self-same (sic)</i>
Self-conceitedness	Self-heal	Self-will
Self-denial	Self-interest	Self-willed
Self-dependent	Self-love	

辞書とはいえ、上掲のうち“self-ended”と“self-heal”の二語に、それぞれ“Self-ended, or *selfish*,” “Self-heal, *an herb*”といった簡易な言い換えが付されている以外は、単に語の羅列に過ぎず、定義と言うにはほど遠い。第2版以降は、“*carefully Revised, with many Important Additions and Improvements*”と付記されているにもかかわらず、*self*-compound については大幅に減り、例えば、第2版 (1713), 第3版 (1731), 第4版 (1739), 第7版 (1757), 第8版 (1772) で記載されているのは、“self-same” (*The self-same, the very same*) のみである。1702年の初版の方がむしろ多種であったのは、17世紀に激増した複合語流行の余波によるものなのか、それ以降の版で削除されたということは必要性がなくなったと(少なくとも編者によって)判断されたことによるものなのか、疑問が残るところである。

2.3 Nathan Bailey

先の Kersey と並んで、18世紀の英語辞書における草分け的な存在が Nathan Bailey (1691-1741) である。彼の編纂した *An Universal Etymological English Dictionary* (初版 1721 : 以降 *UEED*) は実に30版も版を重ね、Dr. Johnson の辞書に少なからぬ影響を与えたことで名が知れる。語源が示されているという点においては、それまでの辞書から一歩進歩したと言えるが、*self*-compound については“self heal”の一語に留まる。しかしながら、Kersey よりは幾分説明が加わり、“SELF HEAL, an Herb, good for Wounds, either inward or outward.”となっている。この語は、読んで字の如く *self* - + “heal” (v.) で、病に対する効能が期待されたツボクサ属の植物(ハーブ)の総称である。

“With large Additions”となっている第2版においても、“self heal”の一語に変わりなく、後続の任意の版、例えば第4版 (1728), 第7版 (1735), 第11版 (1745), 第15版 (1753), 第21版 (1770), 第23版 (1773), 第24版 (1776), 第25版 (1783), 第28版 (1800) においても同様である。

2.4 その他の辞書編纂者

先に述べた Kersey, Bailey の辞書ほど知れ渡ってはいないが、他の 18 世紀の編纂者の辞書についてもいくつか挙げておく。

まず、Thomas Dyche (1695?-c1733) と William Pardon 共編の *A NEW GENERAL English Dictionary* (初版 1735 : 以降 *NGED*) についてである。巻頭に文法の解説 (*A Compendious English Grammar*) があったり、収録語にアクセントが表示 (例 : SELF-EVIDENT) されるなど、それまでの辞書に比べると使い勝手のよい辞書であるが、*self* の複合語は、今回調査した第 2 版 (1737)、第 6 版 (1750)、第 8 版 (1754)、第 11 版 (1760)、第 13 版 (1768)、第 16 版 (1777) に至るまで、もっぱら [表 2 a] に示した三語である。⁷⁾

[表 2 a] *NGED* (1737 : 第 2 版)

SELF-DEPENDENT	SELF-ENDED	SELF-EVIDENT
----------------	------------	--------------

しかしながら、最後の第 17 版 (1794) になると、以下の [表 2 b] のように、複合語の例がわずかながら増えている。⁸⁾

[表 2 b] *NGED* (1794 : 第 17 版)

> <i>self-love</i>	> <i>self-evident</i>	SELFHEAL
> <i>self murder</i>	> <i>self-opinioned</i>	SELFSAME

“Self” 自体についても、それまで “one’s own Person or Affairs” という簡易な定義であったのが、第 17 版では “It is united to the pronouns *him, my, thy, our, your, etc.* Sometimes it is an adjective signifying *very, particular, etc.*” といった文法的な説明が加えられ、複合語についても “it is often used in composition” と付記されるなど、辞書機能が幾分改善されている。

また、18 世紀中葉に刊行された Benjamin Martin (1705-1782) 編纂の *Lingua Britannica Reformata* (初版 1749 : 以降 *LBR*) においても、*NGED* 同様、文法の解説 (*Introduction to the English Tongue*) やアクセントの表示がなされている。*Self* compound については、以下の通りである。

[表 3] *LBR* (1749 : 初版)

SELF-conceit	SELF-dependent	SELF-heal
SELF-denial	SELF-evident	SELF-murder

1754 年の第 2 版では、“self-conceit” が外されている以外は初版と同じである。

次に、仏英・英仏辞典の例を挙げてみる。Abel Boyer (1667-1729) の *THE ROYAL DICTIONARY ABRIDGED* (初版 1708 : 以降 *RDA*) では、比較的多くの *self*-compound が扱われている。さらに、第 12 版以降 “self-interested/-ness” も増えている。⁹⁾

[表 4 a] *RDA* (1708 : 初版)

Self-heal	Self-conceited	Self-willed
Self-same	Self-denial	Self-evident
Self-conceit	Self-love	Self-dependent
> Self-conceitedness	Self-will	Self-ended

[表 4 b] *RDA* (1767 : 第 12 版), (1797 : 第 19 版)

Self-heal	Self-denial	Self-willed
Self-same	Self-love	Self-evident
Self-conceit	Self-interested	Self-dependent
> Self-conceitedness	Self-interestedness	
Self-conceited	Self-will	

2.5 まとめ

これまで扱った辞書のうち、1755 年以前に出版されたものに記載された *self* compound をまとめてみると、[表 5] の通りである。辞書に記載された回数と *OED*² の初出年を右横に併記しておく。¹⁰⁾

[表 5] *NED*, *UEED*, *NGED*, *LBR*, *RDA*

<i>self</i> compounds	掲載数	初出年	<i>self</i> compounds	掲載数	初出年
self-conceit	3	1588-9	self-heal	4	a1387
self-conceited	2	1595	self-interest	1	1658
self-conceitedness	2	c1616	self-love	2	1563
self-denial	3	1642	self-murder	2	1563-83
self-dependent	4	1677	self-same	2	c1407
self-ended	3	1645	self-will	2	c888
self-evident	4	1690	self-willed	2	c14--

現在にも残る “self-will” であるが、初出年が OE に遡る意味は、中英語 (Middle English : 以降 ME) の時代には既に廃語で、これに取って代わる現存の意味の初例は ME 期 (1400 年代) より登場する。¹¹⁾ 同じく ME 期に初出年 (a1373) である “self-heal” は、殆どの辞書で見出し語として記載されており、他の多くの語が EModE 期に現れる中、複合語として根付いて長いことが推断される。これら二語について、*OED* にも “The only survivals of the OE. compounds in ME. are SELF-WILL and its cognates; these, together with the plant-name SELF-HEAL (which may also have been common Germanic) are the only representatives in that period of the prefix-formation.” と解説されている。

3. Johnson 博士の『英語辞典』

3.1 *Self* compound のリスト

それでは、Samuel Johnson (1709-1784) の『英語辞典』(*A DICTIONARY OF THE ENGLISH LANGUAGE*, 初版 1755 : 以降 *Dr.J*) の場合はどうであろうか。語源や複数形の記載などは当然のことながら、特にこれまでの辞書から徹底的に進化した点は、“self” だけで 8 細目に及ぶ厳密な定義と過去の文人の書から引用した例文の豊かさである。特に *self* compound については、第 8 項に “It is much used in composition, which it is proper to explain by a train of examples.” として多種多様な例によって裏付けている（但し、各複合語の具体的な意味については触れていない）。この点が *Dr.J* の顕著な特徴で、小島 (1999: 126) の中でも以下のように述べられている。

『ジョンソン辞典』の特徴はいろいろあげることができるが、なんといっても特筆大書すべきことは、英語辞書では初めて帰納的 (inductive) 語義記述法をとったことである。ジョンソンはまず多くの用例を集め、その文脈の中での意味の違いから各語の語義を割り出すという帰納的方法をとったのである。この方法はそれから百数十年後の *OED* の編集でも踏襲された、記述的辞書編集の基本であり、これを確立した意義は大きい。

Dr.J からの例の多さを考慮し、名詞、形容詞、分詞形容詞 (*-ing*, *-ed*) に分けて、以下に挙げておく。尚、複数回使用されている語については、その回数を併記しておく。

[表 6 a] *Dr.J*(1755 : 初版) 名詞 : 40 例

> <i>self</i> abuse	> <i>self</i> denial 2	> <i>self</i> mettle
> <i>self</i> activity	> <i>self</i> destruction	> <i>self</i> motion
> <i>self</i> affair	> <i>self</i> determination	> <i>self</i> movent
> <i>self</i> chain	> <i>self</i> esteem	> <i>self</i> murder 2
> <i>self</i> caparisons (<i>sic</i>) ¹²⁾	> <i>self</i> evidence	> <i>self</i> offence
> <i>self</i> charity	> <i>self</i> examination	> <i>self</i> opinion 2
> <i>self</i> conceit	> <i>self</i> existence 2	> <i>self</i> praise
> <i>self</i> conceitedness	SELFHEAL	> <i>self</i> preservation 3
> <i>self</i> consciousness	> <i>self</i> homicide	> <i>self</i> slaughter
> <i>self</i> contradiction	> <i>self</i> imposture	> <i>self</i> sufficiency 3
> <i>self</i> conviction	> <i>self</i> interest	> <i>self</i> will
> <i>self</i> deceit	> <i>self</i> love 5	> <i>self</i> wrong
> <i>self</i> defence	> <i>self</i> mate	
> <i>self</i> delusion	> <i>self</i> metal	

[表 6 b] 形容詞 : 10 例

> <i>self</i> conscious	> <i>self</i> diffusive	> <i>self</i> same 2
> <i>self</i> evident	> <i>self</i> existent 3	> <i>self</i> sufficient 2
> <i>self</i> communicative	> <i>self</i> glorious	
> <i>self</i> contradictory	> <i>self</i> like	

[表 6 c] *-ing*形容詞 : 19 例

> <i>self</i> abhorring	> <i>self</i> devouring	> <i>self</i> neglecting
> <i>self</i> accusing ¹³⁾	> <i>self</i> flattering	> <i>self</i> pleasing
> <i>self</i> confiding 2	> <i>self</i> harming	> <i>self</i> reproving
> <i>self</i> considering	> <i>self</i> imparting	> <i>self</i> seeking
> <i>self</i> consuming 2	> <i>self</i> knowing	> <i>self</i> tormenting
> <i>self</i> denying	> <i>self</i> loving	
> <i>self</i> determining	> <i>self</i> moving	

[表 6 d] *-ed*形容詞 : 14 例

> <i>self</i> affrighted	> <i>self</i> conceited	> <i>self</i> restrain'd
> <i>self</i> banish'd	> <i>self</i> kindled	> <i>self</i> roll'd
> <i>self</i> begotten	> <i>self</i> left	> <i>self</i> subdu'd
> <i>self</i> born 2	> <i>self</i> mov'd	> <i>self</i> will'd
> <i>self</i> center'd	> <i>self</i> opinioned	

*Dr.J*では、*NGED*と同じく、見出し語が大文字表記で、複合語の例の *self*・の箇所はイタリック体である。“self-heal”については、これまでに挙げた辞書と同様、複合語の一例ではなく、独立した見出し語として掲載されている。

[表 5] に挙げた *Dr.J*以前に初版の出された辞書では、5つを合計しても *Dr.J*1つに到底及ばないほど *Dr.J*の例は豊富である。特に“conviction,”“conscious,”“contradictory,”“delusion,”“confiding < confide,”“consuming < consume”といったラテン語源の語や“esteem,”“preservation,”“communicative,”“determining < determine,”“devouring < devour,”“imparting < impart”といったラテン語語源のフランス語との組み合わせが際立つ。EModE から LModE にかけて、本来語の *self*・と外来語から成る混種語 (hybrid) の複合語が大幅に増え、その動向を見逃さず自らの辞書に積極的に採り入れた結果と思われる。

3.2 *Dr.J*からの具体例

例文の出所は、Shakespeare, Spenser, Sidney, Milton, Pope, Dryden, Locke, Addison などといった文学史・社会学史的に著名な作家の作品、聖書・説教集の一節から、現代では知名度の低い作家のものに至るまで多岐にわたっている。Richardson をはじめ、Defoe や

Fielding など小説黎明期を代表する作家については、*Dr.J* とほぼ同時代であるためか、Swift から引用した “self-conviction” の例を除くと、一例も見当たらない。

ここで、*Dr.J* が引用している Shakeapeare とその他の作家から具体例をいくつか挙げておく。尚、比較のために、Project Gutenberg が提供する Shakeapeare の電子テキスト (*The Complete Works of William Shakespeare*: 以降 *CWSH*) からの例も一部挙げておく。

- (4) A full hot horse, who, being allow'd his way,
Self-mettle tires him. *Shakespeare.*
- (5) He walks, and that self-chain about his neck,
Which he forswore. *Shakespeare.*
- (6) Else one self-mate and mate could not beget
Such different issues. *Shakespeare.*
- (7) a. I'm made of that self-metal as my sister,
And prize me at her worth. *Shak. King Lear. (Dr.J)*
b. I am made of that self metal as my sister,
And prize me at her worth. *Shak. King Lear. (Arden 版)*
c. I am made Of the selfsame metal that my sister is,
And prize me at her worth. *CWSH (Gutenberg)*
- (8) Him fast sleeping soon he found
In Labyrinth of many a round self-roll'd. *Milton.*
- (9) God, who is an absolute spiritual act, . . . must needs be
. . . infinitely selfimpacting and communicative. *Norris.*

(4) の “self-mettle” は、*OED*² の self- prefix の 5. の項 “Compounds in which self- is in the adjective relation:” の一例となっているが、この self- は、“relating to oneself, one’s own, personal, individual, private, intimate.” を表し、今では廃用である。次に続く “self-chain,” “self-mate,” “self-metal” を *Dr.J* では 上掲の (5), (6), (7a) のようにハイフン付きで複合語の項に例示しているが、Arden 版ではこれらのどれにもハイフンはない。複合語としての “self-chain” は、*OED* による初例が Christina Rossetti の *Poems*: “Who from thy self-chain shall set thee free?” (1882) で時代的に隔たりがあり、(5) の意味・用法と同じとは言いがたい。(6) の “self-mate” についても、複合語としての記載はチェスの用語 (初出年: 1867) であって、引用 (6) の意味ではない。(7a) の “self-metal” については、既述のように、Arden 版ではハイフンのない (7b) の “self metal” と解し、さらに (7c) に挙げた *CWSH* では “selfsame metal” となっている。この (5) から (7) の self-compound については、5.2 の方で改めて論じることとする。

(8) の “self-roll’d” は Milton の *Paradise Lost* から, (9) の “self-imparting” は J. Norris からの例であるが, どちらの複合語も *OED*² には記載がない。但し, *OEDonline* には (8), (9) がそれぞれ唯一例 (“self-roll’d” : 1667, “self-imparting” : 1687) として挙げられており, 共に EModE 期に新たに加わった造語と見られる。

4. Shakespeare の作品より

4.1 Self-Compound のリスト

Dr.J に, 個人の作家として最も多く引用されているのは, 言うまでもなく Shakespeare である。そこでこのセクションでは, Shakespeare の作品に見られる *self-compound* (複合語かどうか定かではないものも, *Dr.J* では複合語の扱いになっているものを含む) を挙げておく。Shakespeare の作品の電子テキストは, 前述の Project Gutenberg 提供のものを活用し, コンコードダンスのソフトにより頻度を求めている。略して表記したものについては, それぞれ略記を以下の通り示しておく。尚, 調査対象とした *CWSh* と *Lucrece* は, 合わせて *Sh* とする。

The Complete Works of William Shakespeare: CWSh

- ・ *All's Well that ends Well: All's Well* ・ *Comedy of Errors: Com. Err.*
- ・ *Henry VIII: Hen. VIII* ・ *Measure for Measure: Meas. for M.*
- ・ *Midsummer Night's Dream: Mids. N.* ・ *Much Ado about Nothing: Much Ado*
- ・ *Troilus and Cressida: Tr. & Cr.*

The Rape of Lucrece: Lucrece

表の各語には *OED*² の初出年を併記するが, *OEDonline* では, *OED*² からかなり修正されているので, より正確な情報と思われる *OEDonline* の年号を, 必要に応じて表や後注に示しておく。また, *OED* の複合語の引用は, それぞれ 1 例の場合が多いが, 初例・唯一例になっているものはボード体で表し, 記載のないもの, もしくは Shakespeare の時代より後のものには網掛け表示をする。なお, 参考までに, Shakespeare と同時代の作家からの引用が初例・唯一例になっている場合も, () 書きで記しておく。

[表 7 a] *Sh* 名詞 : 24 例

<i>self(e)-compounds</i>	頻度	初出年	N.B.
self-abuse ¹⁴⁾	1	1605	<i>Macbeth</i> : 初例
self-admission ¹⁵⁾	1	1606	<i>Tr. & Cr.</i> : 唯一例
self-affair ¹⁶⁾	1	1590	<i>Mids. N.</i> : 唯一例
self-assumption ¹⁷⁾	1	1606	<i>Tr. & Cr.</i> : 唯一例
† self-blood ¹⁸⁾	1	1603	(B. Jonson : 初例)
self-bouty ¹⁹⁾	1	1604	<i>Othello</i> : 唯一例
self-breath ²⁰⁾	1	1606	<i>Tr. & Cr.</i> : 唯一例

self-chain ²¹⁾	1	(1882)	
self-charity ²²⁾	1	a1616	<i>Othello</i> : 唯一例 (<i>OEDonline</i>)
self-comparison ²³⁾	1	1605	<i>Macbeth</i> : 初例
self-danger ²⁴⁾	1	1611	<i>Cymbeline</i> : 唯一例
self-example	1	---	記載なし
self-explication ²⁵⁾	1	a1616	<i>Cymbeline</i> : 唯一例
self-love	8	1563	(W. Baldwin <i>et al.</i> : 初例)
self-mate ²⁶⁾	1	(1867)	
self-mettle ²⁷⁾	1	1613	<i>Hen. VIII</i> : 唯一例
self-offence ²⁸⁾	1	1603	<i>rare. Meas. for M.</i> : 唯一例
self-place ²⁹⁾	1	1509	
self-reproving ³⁰⁾	1	1608	<i>King Lear</i> : 初例
self-slaughter ³¹⁾	2	1605	<i>Hamlet</i> : 初例
self-sovereignty ³²⁾	1	(1905)	
self-trust	1	1583	(Golding : 初例)
self-will	1	OE	
self-wrong ³³⁾	1	1590	<i>Com. Err.</i> : 唯一例
合 計	32		

[表 7 b] *Sh* 形容詞 : 5 例

self(e)- compounds	頻度	初出年	N.B.
self-glorious ³⁴⁾	1	1599	<i>Henry V</i> : 初例
self-gracious ³⁵⁾	1	1601	<i>All's Well</i> : 唯一例
self-same	19	c1407	(Now <i>literary</i> . Lydgate : 初例)
self-substantial ³⁶⁾	1	c1600	<i>rare. Sonnets</i> : 唯一例
self-unable	1	---	記載なし
合 計	23		

[表 7 c] *Sh* -ing 形容詞 : 5 例

self(e)- compounds	頻度	初出年	N.B.
self-doing	1	---	記載なし
self-drawing	1	1613	<i>OED² Henry VIII</i> : 唯一例
self-harming	1	a1616	<i>Com. Err.</i> : 初例
self-loving ³⁷⁾	2	1590	(<i>Master Broughtons Lett.</i> : 初例)
self-neglecting ³⁸⁾	1	1600	<i>Henry V</i> : 初例 (<i>OEDonline</i>)
合 計	6		

[表 7 d] *Sh* -*ed* 形容詞 : 11 例

<i>self</i> (<i>e</i>)- compounds	頻度	初出年	N.B.
self-affected	1	1609	<i>Tr. & Cr.</i> : 唯一例
self-affrighted ³⁹⁾	1	1593	<i>Richard II</i> : 唯一例
self-born(<i>e</i>) ⁴⁰⁾	2	1587	(Golding : 初例)
self-covered	1	---	記載なし
self-endearred ⁴¹⁾	1	1599	<i>Much Ado</i> : 唯一例
self-figured ⁴²⁾	1	1611	<i>Cymbeline</i> : 唯一例
self-killed ⁴³⁾	1	c1600	<i>Sonnets</i> : 初例
self-misused ⁴⁴⁾	1	1594	<i>Richard III</i> : 唯一例
self-slaughtered	1	1594	<i>Lucrece</i> : 初例
self-subdu'd ⁴⁵⁾	1	1605	<i>King Lear</i> : 唯一例
self-willed	4	c1470	(G. Ashby : 初例)
合 計	15		

[表 7 e] *Sh* 動詞 : 1 例

<i>self</i> (<i>e</i>)- compounds	頻度	初出年	N.B.
self-apply ⁴⁶⁾	1	1597	<i>Louers Complaint in Sonnets</i> : 唯一例
合 計	1		

4.2 *Sh* からの具体例

[表 7 a] から [表 7 e] により、殆どの *self*-compound が EModE 期に初出であることが分かる。*OED* の解説の通り、この時代に激増したことが察せられるが、特に、初例・唯一例、もしくは *OEDonline* にも記載されていない当時目新しい語が占めている。当時の傾向として最も多いのは、“self-comparison,” “self-neglecting” のように、*self*- が「第二要素に対して目的語の関係」にある複合語であるが、Shakespeare ではそれと並んで多いのが “self-breath” (*i.e.* one’s own words), “self-danger” (*i.e.* personal danger) のように、*self*- が「形容詞の関係」にある複合語である（後注参照）。⁴⁷⁾ ちなみに、*OED* に *self*- が「副詞的關係」として記載されている “self-assumption” は *OED* の唯一例であるが、Richardson もこの同じ複合語を *CI* の中で “(I must be allowed to say this to you, and no great self-assumption neither)” (*CI* Vol.I. Let.20, p.147) のように活用している。さらに Shakespeare 同様、*OEDonline* にも記載のない *self*-compound を数多く用いている。⁴⁸⁾

確かに、複合語はほぼ無限に拡大するとはいえ、Shakespeare の造語力は並外れており、後続の作家に少なからぬ影響を与えたことが窺い知れる。中でも、以下の例には注目したい。

- (10) But like a common and an outward man
That the great figure of a council frames

By self-unable motion; *All's Well That Ends Well*(1603)

(11) But, lest myself be guilty to self-wrong,

I'll stop mine ears against the mermaid's song. (*CWSH: Com. Err.*⁴⁹⁾)

cf. But lest myself be guilty of self-wrong, . . . (*Dr.J*)

(12) I might as yet have been a spreading flower,

Fresh to myself, if I had self-applied

Love to myself, and to no love beside. (*CWSH: A Lover's Complaint* (1609))

(10) のように, *self-* に否定接頭辞のついた形容詞を結合させることは, 1. 1 で挙げた Richardson の (3) の “self-undone” に相通ずるところである。“self-undone” 同様, “self-unable” は *OED* に記載のない稀な複合語で, Onions による Shakespeare の語彙注釈書では, 第 4 項で “impotent of one's own self” と定義されている。また, Schmidt の *Shakespeare-Lexicon* (以降 *Schmidt*) では, “self-unable motion” で “a motion, which is itself unable.” と解説されている。(11) では, “self-wrong” が名詞として用いられている。*OED*² では特に名詞としては触れられていないが, *OEDonline* では名詞と明記され, 唯一例となっている。この複合語の意味は, *Schmidt* では, “injury done to one's self” と定義されている。(12) は *self-* が動詞と結びついた例であるが, EModE 期の複合語は, 米倉 (2006: 174) に「複合動詞と複合副詞は殆ど使われていない」と指摘されるように, 本稿で調査した *Sh* の資料においては動詞用法はこの一例に限られ, *OEDonline* でも (12) が唯一例である。

ちなみに, *OED* に記載のない他の *self-* compound については, *Schmidt* に以下のように定義されている。

(13) a. Self-example: one's own precedent

b. Self-doing: committed by oneself

c. Self-covered: clothed, dressed in one's native semblance

5. 18 世紀の辞書 : Dr. Johnson の『英語辞典』以降

5.1 *Dr.J* 刊行を経て

当時最も権威ある *Dr.J* であるが, それではその後の辞書は, それ以前のものとどう変わっていったのか, ここでは初版が *Dr.J* 刊行後の辞書をいくつか挙げておく。

まず, William Rider (1723-1785) 編纂の *A New Universal English Dictionary* (初版 1759: 以降 *NUED*) と Francis Allen 編纂の *A COMPLETE English Dictionary* (初版 1765: 以降 *CED*) が挙げられるが, 特に前者は *Dr.J* の直後に刊行されたためか, *Dr.J* 以前の辞書と変わりはなく, *self*-compound についても “self-same” の一語に過ぎない。

但し, 上記の *NUED* や *CED* と時をほぼ同じく Robert Ainsworth (1660-1743) によって出された英羅辞典 *An ABRIDGEMENT OF AINSWORTH'S DICTIONARY OF THE LATIN*

TONGUE (初版 1758 : 以降 *AADL*) には、以下の通り比較的多くの語が収録されている。

[表 8 a] *AADL* (1758 : 初版)

> <i>selfsame</i> ⁵⁰⁾	<i>Selfheal</i>	<i>Selfwilled</i>
<i>Selfdenial</i>	<i>Selfmurder</i>	<i>Selfwilledness</i>
<i>Selfevident</i>	<i>Selfwill</i>	

[表 8 b] *AADL* (1798 : 第 5 版 (最終版))

> <i>selfsame</i>	<i>Self conceitedness</i>	<i>Self will</i>
<i>Self-conceit</i>	<i>Self denial</i>	<i>Self-willed</i>
<i>Self conceited</i>	<i>Self-evident</i>	<i>Self-willedness</i>
<i>Tb be self concened (sic)</i>	<i>Self-murder</i>	

5.2 John Ash

さて、*Dr.J* から経ること 20 年後に世に出た John Ash (1724–1779) の *THE NEW AND COMPLETE DICTIONARY OF THE ENGLISH LANAUGE* (初版 1775 : 以降 *NCDE*) では、*self*-compound が圧倒的な収録数を誇るることとなる。この豊富な語彙数をはじめ、一部の語についてではあるが、過去に使用した作家名を併記している点で *Dr.J* からの影響を感じるが、*Dr.J* のように多種多様な引用には至ってはいない。しかしながら、*Dr.J* では *self*-compound の例示に留まったのに対し、Ash の *NCDE* では、見出し語としてそれぞれの語の構造と意味を併せて示しており、その点では一歩進んだものになっている。

以下の [表 9] には *NCDE* に掲載された *self*-compound を全て挙げておくが、これまでの多くの辞書とは異なり、形態素同士をハイフンで結ばず表記している (一部アルファベット順になっていないが、そのまま写すことにする)。

[表 9] *NCDE* (1775 : 初版)

Selfabasement	Selfdeceiving	Selfmate <i>Shakespeare.</i>
Selfabhorrence	Selfdeception	Selfmetal <i>Sh.</i>
Selfabuse	Selfdefence	Selfmettle <i>Shakespeare.</i>
Selfaccused	Selfdefended	Selfmoved
Selfaccusing	Selfdeluded	Selfmoving
Selfactive	Selfdelusion	Selfmotion
Selfactivity	Selfdenial	Selfmovent <i>Grew.</i>
Selfaffairs (<i>sic</i>)	Selfdenying	Selfmurder
Selfaffrighted	Selfdestroyed	Selfmurderer
Selfapplause	Selfdetermination	Selfneglected
Selfapprobation	Selfdetermined	Selfneglecting

Selfbanished	Selfdevouring	Selfoffence <i>Shakespeare.</i>
Selfbegotten	Selfdiffusive	Selfopinion <i>Prior.</i>
Selfborn	Selfesteem	Selfopinioned
Selfcomparison <i>Sh.</i>	Selfevidence	Selfpleasing
Selfcomposure	Selfevident	Selfpossession
Selfcentered	Selfexamination	Selfpraise
Selfchain <i>Sh.</i>	Selfexistence	Selfpresevation
Selfcharity	Selfexistent	Selfreproof
Selfcommunicative	Selfflattering	Selfreproving
Selfconceit	Selfglorious	Selfrestrained
Selfconceited	Selfharming	Selfrestraint
Selfconceitedness	Selfhomicide <i>Hakewell.</i>	Selfrighteous
Selfconfidence	Selfimparting	Selfrighteousness
Selfconfident	Selfimportance	Selfrolled <i>Milton.</i>
Selfconfiding	Selfimportant	Selfsame
Selfconscious	Selfimposture	Selfseeking <i>adj.</i>
Selfconsciousness	Selfinterest	Selfseeking <i>s.</i> ⁵¹⁾
Selfconsidering	Selfinterested	Selfslaughter
Selfconsumed	Selfjusticiary	Selfslaughtered
Selfconsuming	Selfjustification	Selfsubdued
Selfcontradiction	Selfkindled	Selfsufficiency
Selfcontradictory	Selfknowing	Selfsufficiency
Selfconviction	Selfleft <i>Milton.</i>	Selfsufficient
Selfdeceit	Selflike <i>Sidney.</i>	Selftormenting
Selfdeceived	Selflove	
Selfdeceiver	Selfloving	

上記の “self-defended,” “self-importance,” “self-important,” “self-justification” においては、それぞれ *OED*² に “1775 in Ash” と示され、初例 (1775) となっている。ちなみに、*OEDonline* によると、この John Ash は “The 512th most frequently quoted source in the *OED*, with a total of 897 quotations (about 0.025% of all *OED* quotations).” とのことである。

NCDE の特徴として、収録語彙数が多いだけでなく、*OEDonline* で初例が a1763 の “self-abhorrence” や 1751 年の “self-approbation” など同時代の最新の語彙を入れていることが挙げられる。“Self-approbation” は、Richardson も *SirCG* の中で “Hitherto I had acted with some self-approbation.” (*SirCG* Vol.II. Let.33, p.276) のように使用している。また、*NCDE* では、“self” に “selfish,” “selfishly,” “selfishnesss” の派生語を併記するだけでなく、以下の (14), (15) のように比較級・最上級に及んでまで説明を加えたり、稀な語には、(16) のような簡易な補注を差し挟んでいる。

- (14) Selfisher: (*adj. comp. of selfish*) Selfish in a greater degree
- (15) Selfishest: (*adj. sup. of selfish*) Selfish in the greatest degree
- (16) Selfjusticiary: (*s. not much used*) One who justifies himself

先の 3.2 において, *Dr.J* の具体例で問題となっていた Shakespeare からの引用 (5) から (7) の “self chain,” “self mate” “self metal,” や (4) に例示した “self mettle” について, *NCDE* には簡略ながら意味が記載されているので, そのままここに挙げておく。

- (17) Selfchain:
(*s. from self, and chain*) The same chain. *Sh.*
- (18) Selfmate:
(*s. from self, and mate*) The same mate, a mate to one’s self. *Shakespeare.*
- (19) Selfmetal:
(*s. from self, and metal*) The same metal. *Sh.*
- (20) Selfmettle:
(*s. from self, and mettle*) Mettle in itself spontaneous courage. *Shakespeare.*

既述の通り, *Dr.J* ではこれら 4 語を全てハイフンで結んで, 第 8 項の複合語の例としている。*NCDE* においても 2 語から成る複合語のように扱われてはいるが, (20) とそれ以外では “self” の意味が異なる。(20) の “self” は上記の “in itself” に相当する働きで, *Schmidt* にも複合語として見出し語にあり, “one’s own fiery temper” という意味である。対して (17) から (19) は下線で示したように, “self” を “same” としている。*Schmidt* も, “self chain,” “self mate,” “self metal” について, 全て pronominal adjective の 3 番目の定義である “same” の例とし, Arden 版においても, それぞれ脚注に “same” と付している。さらに, Arden 版では, (5) の “self chain” について “*self*: same; See Abbott 20” と補足し, その Abbott は, “self” が形容詞の “same” の用法に言及している。(6) については, *Dr.J* では “Else one self-mate and . . .” のように, “self” と “mate” を一つのユニットと解しているのに対し, Arden 版では “self” を前の語の方に結びつけ “*one self*: one and the same” としている。(7) の “self metal” について言うと, 比較のために (7c) に挙げた *CWSH* では, “self-metal” の複合語ではなく “selfsame” の方を複合語としている。“Selfsame” は ME 期より長く残る形容詞で, “(The) very same, very identical.” (*OED*, s.v. “selfsame”) という意味であるが, 第一要素の “self” が “same” の意味であると言うことは, 同じ意味の第二要素を強める働きとなる。

Shakespeare の前時代である ME 期に辿ってみると, Chaucer の *Glossary* には, “self: *adj.* same, self-same, very” がまず示されており, *OED*² の B の項にも, “self (*adj.*) = same (and in derived senses)” と形容詞の意味が筆頭に記載されている。*Dr.J* においても “self” の第 1 項では, “Its primary signification seems to be that of an adjective” とし, “that self way” (*Shakesp.*), “On these self hills” (*Raleigh*) や “At that self moment” (*Dryden*) などを例に挙げている。ちなみに, *CWSH* でハイフン付きの “self-sovereignty” について, 複合語としての

用法は, *self- prefix* の 5.c. “having an independent existence, position, or authority; †pristine, original.” で, 初例 (“The full self-sovereignty of Japan.”) が [表 7 a] にも示したように 1905 年であり, Shakespeare の意味とは異なると思われる。実際, *Schmidt* でも “self-sovereignty” を “i.e. the same sovereignty” として, “self” を前述の例と同じく “same” と解している。⁵²⁾

さて, “self chain,” “self mate,” “self metal” に話を戻すと, 解釈の違いにもよるが, これらの語は, *Dr.J* に例示されるような複合語として確立されたものというよりも, 本来形容詞が後続の名詞を修飾し, 意味的に結びつきの強い「形容詞＋名詞」の句であると思われる。研究社の『新英和大辞典』に “self” *adj.* の 5 として「(廢) 同一の (same)」と記載されているように, 現代英語では廃用で, 時の流れと共に代名詞的な “one’s self, one’s own” の意味が優勢となり, その意味から派生した複合語が, 後の時代に主に使用されるようになったものと考えられる。

6. 結語

辞書の役目は時代により用途により異なるが, *self- compound* という個別の複合語に的を絞って史的に辿っていくと, 初期の時代においては, 古来より存在する複合語を除くと, 収録される複合語の種類, 定義の仕方は辞書によって異なる場合が多い。どの語を採択するかは編纂者独自の判断や趣向にある程度作用されるのか, 辞書としての理念・方向性がまだ確立されていないことが窺える。しかしながら, *Dr.J* 刊行の後, *Ash* の *NCDE* に見られるように, 辞書機能はかなり改善されており, 充実した内容面において, *Dr.J* が当時与えたインパクトが強いことが推察できる。*Dr.J* では, “self” だけで 8 項目に及ぶ的確且つ厳密な定義とその定義を裏付ける豊富な引用例において, 他の追随を許さないが, 特に Shakespeare からの引用例は抜きん出ている。それだけ Shakespeare が多くの新語を造り出し活用したということであろうが, Richardson をはじめ, 後代の作家に少なからぬ刺激を与えたことが偲ばれる。

注：

- 1) 総語彙数は, 大まかに見て *Pam* が約 44 万語 (女中の巻と結婚後の巻を合わせて), *CI* が約 98 万語, *SirCG* は約 75 万語である。
- 2) 下線部は筆者による強調。以降, すべての下線, 網掛けは筆者による強調。
- 3) 以降, Richardson の作品は, 引用文献に載せている Shakespeare Head 版を使用。
- 4) *OEDonline* は, 年に 4 回 (3 ヶ月単位で) 更新・改訂が行われるが, 本稿は, 2016 年 10 月現在の情報である。
- 5) 以降, 初期の辞書のタイトルは, 副題の場合も含め, オリジナル表記に準ずる。
- 6) 数学者の父親 John Kersey the elder (1616–1677) との混乱を避けることによる。
- 7) 2.3 の *UEED* では, 元々見出し語は大文字で記載され, *self* の複合語にはハイフンが付いていないが, 第 4 版以降, “SELF *Heal*” のように第 2 要素がイタリック体で表記され, さらに, 第 15 版, 第 23 版, 第 25 版, 第 28 版では, “SELF-*Heal*” のようにハイフンで結ばれている。また, 2.4 の *NGED* においては, 見出し語が大文字, 例として挙げられて

いる語の“self”の箇所はイタリック体である。辞書によって表記の仕方が異なるが、本稿では、基本的に、各辞書のオリジナル表記に従うこととする。

- 8) > の記号は、派生語もしくは例としての記載。
- 9) *RDA* では、必ずしもアルファベット順にはなっていないが、オリジナルの掲載順に従う。
- 10) 重複を避けるために、版が異なっても同じ辞書であれば、掲載回数としては1とする。
- 11) *OEDonline* では c1470 年である。
- 12) “Selfcaparisons”について、*Dr.J* では初版に続き第四版(1773)でも“selfcaparisons”となっているが、*CWSH* では“self-comparisons”であり、誤記の可能性あり。*Ash* の *NCDE* にも、Shakespeare からの引用として“selfcomparison”の方の記載がある。
- 13) 初版ではハイフンがないが、第4版では“self-accusing”のようにハイフン付きである。
- 14) “self-abuse”: *OED²* では初出年が1605であるが、*OEDonline* では a1616 に修正。
- 15) “self-admission”: self- prefix の1. の項 “self is in the objective relation to the second element” の用例で、*OED²* では初出年が1606であるが、*OEDonline* では1609に修正。
- 16) “self-affair” (self-affaires): *OED²* の self- prefix の5. の項 “self is in the adjective relation: †5.a = relating to oneself, one’s own, personal, individual, private, intimate.” の用例で廃用。*Schmidt* では、“Self-affairs”で、“one’s own business”と定義されている。
- 17) “self-assumption”: self- prefix の3. の項 “self is adverbial” の用例で、*OED²* では初出年が1606であるが、*OEDonline* では1609に修正。
- 18) “self-blood”: *OED²* では初出年が1603であるが、*OEDonline* では1605に修正。
- 19) “self-bounty”: 上掲の“self-affair”と同じく、*OED²* の self- prefix の5.a. の項の用例。
- 20) “self-breath”: 同じく、self- prefix の5.a. の項の用例。
- 21) “self-chain”: *OED²*, *OEDonline* 共に、self- prefix の5.e. の項 “= caused by oneself, of one’s own making.” の用例であるが(3.2で挙げた通り、1882年のRossettiの*Poems*からの引用)、Shakespeareとは時代的にも意味的にも異なる可能性が高いため、初出年には()を付けて、後のセクション(5.2)で改めて論じる。尚、この複合語には、“This use is rare; the mod. examples are due to analysis of compounds illustrated under 2; e.g. self-chain from ‘self-chained’.”と付記されている。
- 22) “self-charity”: *OED²* では見出し語としても引用例にもないが、*OEDonline* では上掲の“self-admission”と同じく、self- prefix の1. の項の用例。
- 23) “self-comparison”: 同じく self- prefix の1. の項の用例で、*OED²* では初出年が1605であるが、*OEDonline* では a1616。
- 24) “self-danger”: “self-affair”と同じく、*OED²* の self- prefix の5.a. の項の用例。
- 25) “self-explication”: *OED²* では初出年が1611であるが、*OEDonline* では a1616 に修正。上掲の“self-admission,” “self-charity”等と同じく、self- prefix の1. の項の用例。
- 26) “self-mate”: *OED²* の初出年が1867の“self-mate”は、あくまでチェスの用語としての定義であるので、初出年には()を付け、“self-chain,” “self-metal”と共に、5.2のセクションで改めて論じる。

- 27) “self-mettle”: “self-affair” と同じく *OED*² の *self- prefix* の 5.a. の項の用例で, [表 7 a] でもその年号を挙げている。
- 28) “self-offence”: *OED*² では初出年が 1603 であるが, *OEDonline* では a1616。
- 29) “self-place”: *OED*² には, *self- prefix* の例ではなく, “†monstrant” (*n. Obs. rare*) という語の唯一例。
- 30) “self-reproving”: 動名詞としての用法。 *OED*² では初出年が 1608 であるが, *OEDonline* では 1605。
- 31) “self-slaughter”: *OED*² では初出年が 1605 であるが, *OEDonline* では a1616。
- 32) “self-sovereignty”: *OED*² の初出年が 1905 で時代的にかけ離れているので, Shakespeare と同じ用法ではない可能性が高いが, この点については, 5.2 で改めて触れることにする。
- 33) “self-wrong”: 名詞としての用法。 *OED*² では唯一例の年号が 1590 であるが, *OEDonline* では a1616 になっている。
- 34) “self-glorious”: *OED*² では初出年が 1599 であるが, *OEDonline* では a1616。
- 35) “self-gracious”: 先の “self-assumption” と同じく, *self- prefix* の 3. の項の用例で, *OED*² では初出年が 1601 であるが, *OEDonline* では a1616。
- 36) “self-substantial”: *OED*² では初出年が c1600 であるが, *OEDonline* では 1609 に修正。
- 37) “self-loving”: *OED*² では初出年が 1590 であるが, *OEDonline* では 1599 に修正。
- 38) “self-neglecting”: *OED*² では *self- prefix* の 1.f. の項 “With *ppl. adjs. in -ing*” の例として 1745 年の引用が挙げられているが, *OEDonline* では 1600 に修正。
- 39) “self-affrighted”: *self- prefix* の 2.a.(a) の項 “Compounds with *pa. pples. and ppl. adjs. in which self- denotes the agent or what is conceived as the agent; = by oneself or itself, by one’s own (unaided) efforts or action, without help from others.*” の用例で, *OED*² では初出年が 1593 であるが, *OEDonline* では 1597 に修正。
- 40) “self-born”: *OED*² では初例が Golding からの引用であるが, *OEDonline* では Sir P. Sidney & A. Golding tr. に修正。
- 41) “self-endearred”: *self- prefix* の 3. の項の用例で, *OED*² では初出年が 1599 だが, *OEDonline* では 1600 に修正。
- 42) “self-figured”: “self-affrighted” と同じく, *self- prefix* の 2.a.(a) の項の用例で, *OED*² では初出年が 1611 であるが, *OEDonline* では a1616。
- 43) “self-killed”: *OED*² では初出年が c1600 であるが, *OEDonline* では 1609 に修正。
- 44) “self-misused” (*self-misvs’d*): “self-affrighted,” “self-figured” と同じく, *self- prefix* の 2.a.(a) の項の用例で, *OED*² では初出年が 1594 であるが, *OEDonline* では a1616。
- 45) “self-subdued”: 上記と同じく, *self- prefix* の 2.a.(a) の項の用例で, *OED*² では初出年が 1605 であるが, *OEDonline* では 1608 に修正。
- 46) “self-apply”: *OED*² では初出年が 1597 だが, *OEDonline* では 1609 に修正。
- 47) “self-breath,” “self-danger” の意味はそれぞれ *Schmidt* より。
- 48) 例えば “self-attempt,” “self-betrayer,” “self-consolation,” “self-contending,” “self-

debating,” “self-degradation,” “self-derivation,” “self-reasoning,” “self-sake” など。

49) *CWSH* に年号が示されていないため不明。 *OEDonline* では a1616 となっている。

50) “*Self*, or *selfsame*” というように, “selfsame” は “self” の見出し語に併記されている。

51) *s*: substantive” (実詞, 名詞[相当語句])。その他の略記で本論文中に直接示していないものは, “*a*: (in dates) ante,” “*c*: (in dates) circa,” “cent.: century,” “*comp*: comparative,” “Let.: Letter,” “mod.: modern,” “*pa. pple*: past participle,” “*ppl. adjs*: participial adjectives,” “*sup*: superlative,” “tr.: translation, translating,” “†: obsolete” である。

52) *Schmidt* には, 見出し語としての “self-sovereignty” (ハイフン付き) と pronominal adjective の 3 番目の定義としての “(*that*) self sovereignty” (ハイフンなし) の両面より記載があるが, いずれにせよ “self” の意味は “same” としている。

引用文献

Richardson, Samuel. (1747-48) *Clarissa or, the History of a Young Lady*, in 8 Vols., The Shakespeare Head Edition of the Novels of Samuel Richardson, Basil Blackwell, Oxford, 1929.

-----, (1753-54) *The History of Sir Charles Grandison*, in 6 Vols.

Shakespeare, William. (1592) *The Comedy of Errors*, ed. R. A. Foakes, (The Arden Edition of the Works of William Shakespeare), Methuen, London, 1962.

-----, *All's Well that Ends Well*, ed. G. K. Hunter (The Arden Edition of the Works of William Shakespeare), Methuen, London, 1962.

-----, (1606) *King Lear*, ed. Kenneth Muir (The Arden Edition of the Works of William Shakespeare), Methuen, London & New York, 1982.

Abbott, E. A. (1884) *A Shakespearian Grammar*, Macmillan & Company, London.

Ball, Donald L. (1976) “Richardson’s Resourceful Wordmaking,” *South Atlantic Bulletin* 41, 56-65.

Davis, Norman, et al., eds. (1979) *A Chaucer Glossary*, Clarendon Press, Oxford.

Fry, Danby P. (1859) “On Some English Dictionaries: Alfred Augustus Fry,” *Transactions of the Philological Society* 6 (1), 257-72.

林 哲郎. (1968) 『英語辞書発達史』(開文社英語学選書), 開文社, 東京.

Johnson, Samuel. (1755) *A Dictionary of the English Language*, Georg Olms Verlagsbuchhandlung (rpt. 1968), London & Hildesheim.

小島 義郎. (1999) 『英語辞書の変遷—英・米・日本を併せ見て—』, 研究社, 東京.

Levinson, Martin M. (2011) “The Oxford Dictionary: A Time-binding Marvel,” *ETC: A Review of General Semantics*, 68 (4), 461-69.

Lynch, Jack. (2000) “The Ground-Work of Stile”: Johnson on the History of the Language,” *Studies in Philology*, 97 (4), 454-72.

- 三輪 伸春. (2011) 『英語の辞書史と語彙史—方法論的考察—』, 松柏社, 東京.
- 永嶋 大典. (1974) 『英米の辞書—歴史と現状—』, 研究社, 東京.
- Onions, C. T. (1953² [1911]) *A Shakespeare Glossary*, Oxford University Press, Oxford.
- Schmidt, Alexander. (1971⁶ [1902]) *Shakespeare-Lexicon: A Complete Dictionary of All the English Words, Phrases and Constructions in the Works of the Poet*, ed. Gregor Sarrazin, Walter de Gruyter, Berlin & New York.
- Simpson, J. A. & E. S. C. Weiner, eds. (1989²) *The Oxford English Dictionary*, Second Edition on CD-ROM Version 4.0 (2009), Clarendon Press, Oxford.
- Starnes, De Witt T. & Gertrude E. Noyes. (1946) *The English Dictionary from Cawdrey to Johnson 1604–1755*, University of North Carolina Press, Chapel Hill.
- 竹林 滋他編. (2002⁶ [1927]) 『研究社 新英和大辞典』, 研究社, 東京.
- Tyrkkö, Jukka. (2013) “Notes on eighteenth-century dictionary grammars,” *Transactions of the Philological Society*, 111 (2), 179–201.
- 脇本 恭子. (2007) 「Richardson の *Pamela* についての一考察—語形成の面から—」, 『岡山大学教育学部研究集録』, 第 134 号, 119-28.
- (2008) 「Samuel Richardson に迫る Sentimentalism の源流—語形成の観点から—」, 『近代英語研究』, 第 24 号, 近代英語協会, 43-74.
- (2009) 「否定表現から比較する Austen の *Pride and Prejudice* と Richardson の *Pamela*」, 『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』, 第 140 号, 43-54.
- (2011) 「Richardson の小説における *un-* 派生語の考察」, 『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』, 第 147 号, 69-79.
- (2012) 「Richardson の小説に見る否定表現としての合成語」, 『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』, 第 149 号, 33-42.
- Wheatley, Henry B. (1865) “Chronological Notices of the Dictionaries of the English,” *Transactions of the Philological Society*, 10 (1), 218–93.
- 米倉 綽. (2006) 『英語の語形成—通時的・共時的研究の現状と課題』, 英潮社, 東京.

オンライン・ソース

- BNC: <URL= <http://corpus.byu.edu/bnc/>>.
- CAWDREY'S A TABLE ALPHABETICAL (1604):
<URL=<http://www.library.utoronto.ca/utel/ret/cawdrey/cawdrey0.html>>.
- COHA: <URL=<http://corpus.byu.edu/coha/>>.
- ECCO:
<URL=<http://www.gale.com/primary-sources/eighteenth-century-collections-online/>>.
- Literature Online: <URL=<http://literature.proquest.com/marketing/index.jsp>>.
- Project Gutenberg: <URL=http://www.gutenberg.org/wiki/Main_Page>.

ECCO:

Ainsworth, Robert. *An ABRIDGEMENT OF AINSWORTH'S DICTIONARY OF THE LATIN TONGUE*, (初版 : 1758) (第 5 版 : 1798).

Allen, Francis. *A COMPLETE English Dictionary*, (初版 : 1765).

Ash, John. *THE NEW AND COMPLETE DICTIONARY OF THE ENGLISH LANGUAGE*, (初版 : 1775).

Bailey, Nathan. *An Universal Etymological English Dictionary*, (初版 : 1721) (第 4 版 : 1728) (第 7 版 : 1735) (第 11 版 : 1745) (第 15 版 : 1753) (第 21 版 : 1770) (第 23 版 : 1773) (第 24 版 : 1776) (第 25 版 : 1783) (第 28 版 : 1800).

Boyer, Abel. *THE ROYAL DICTIONARY ABRIDGED*, (初版 : 1708) (第 12 版 : 1767) (第 19 版 : 1797).

Bullock, John. *The English Expositor IMPROVD*, (第 10 版 : 1707 年) (第 12 版 : 1719 年), (第 19 版 : 1775).

Dyche, Thomas & William Pardon. *A NEW GENERAL English Dictionary*, (第 2 版 : 1737) (第 6 版 : 1750) (第 8 版 : 1754) (第 11 版 : 1760) (第 13 版 : 1768) (第 16 版 : 1777) (第 17 版 : 1794).

Johnson, Samuel. *A DICTIONARY OF THE ENGLISH LANGUAGE*, (第 4 版 : 1773).

Kersey, John. *A New English Dictionary*, (初版 : 1702) (第 2 版 : 1713) (第 3 版 : 1731) (第 4 版 : 1739) (第 7 版 : 1757) (第 8 版 : 1772).

-----, *Dictionarium Anglo-Britannicum*, (初版 : 1708).

Martin, Benjamin. *Lingua Britannica Reformata*, (初版 : 1749).

Rider, William. *A New Universal English Dictionary*, (初版 : 1759).